ジャン・ジオノの『丘』の独創性

山本　省

序.『丘』研究の現状とこの論考の狙い

ジオノ研究の大御所であるピエール・シトロン氏(長年にわたり「ジャン・ジオノ友の会」の会長をつとめ、現在は名誉会長。パリ第３大学名誉教授)による大著『ジオノ』では、この物語がきわめて好意的にフランス文学界に受け入れられた状況が次のように述べられている。「ジオノがつねに心からの愛着を抱いていた『丘』は、並々ならない成功を収めた。ブラジャックからシャンソンにいたる批評家たちはほぼ全員一致してこの作品を褒め、さらに読者にも快く受け入れられた。この物語は文学の世界に新鮮な風を吹きこんだ。ジオノは文体と読者を見いだしたことになる。彼の本はこのあと10年にわたって、この推進力から湧き出てくる泉を水源とする路線で書かれることになるだろう。」[1]

ジオノ自身は、この物語が小説というよりもむしろ詩であるということを認めていた。そのことは、とりわけ作品冒頭の数ページを読めば、たちどころに理解できることである。あまりにもたくさんの動物が登場するが、この光景はあくまでジオノの創造した世界であり、この地方にこれだけの動物が密集しているわけではない。しかし、こうした文体は初期のジオノに特徴的なものなのである。(以上、シトロン氏の指摘)

さらに、「リーヴル・ドゥ・ポッシュ」の解説において、マリア=メディアヴィラ氏は、『丘』は短い導入部のあと、緊張感が結末に向かって高まっていく物語であると述べている。「この短い説明のあと、物語は２週間にわたり繰り広げられるが、危機感は絶頂に向かって高まっていき、ジャネの死によって大団円を迎える。」[2] 事件そのものの恐ろしさというよりも、住民たちの危機感の高まりを描写することがジオノの狙いだったということが指摘されている。

こうした先行研究を踏まえた上で、私の解釈を提示していこう。

村人たちの危機感の高まりが主要なテーマであるが、そのような物語を実現することができたのは、ジオノの幻視者(visionnaire)としての雄弁な描写力のおかげであるということを示していきたい。『憐憫の孤独』や『ジャン・ル・ブルー』や『世界の歌』のなかでも存分に発揮されることになるこの幻視者的な描写力は、この物語が最初の出版作品であっただけに、いっそうの迫力がうかがえるのである。リュール山麓の自然を舞台にする『丘』における作者の空想力はとりわけ斬新で迫力がある。ジッドをはじめとする当時のパリ文壇の人々が拍手喝采して好意的にこの作品を迎えたというのも、よく理解できる次第である。[3]

なお、この作品の独特の文体を味わっていただくために、引用文はいくらか長めにす

ることをまずお断りしておきたい。

1．物語の発端—自然のなかで人間は原始人に等しい存在である—

ジオノはリュール山(標高 1829 メートル)に終生愛着を抱いていた。そのリュール山麓の架空の集落が『丘』の舞台である。リュール山麓では住人の数は少なく、彼らは自然のなかでひっそり暮らしている。事態は現在でもそれほど変わっているわけではない。ジオノたちが数年(1935 年から 1939 年まで)にわたり共同生活をしたことで知られているル・コンタドゥール高原を訪問すると、限りなく天空に近いこの高原では、私たちは自然のなかのごく小さなひとつの要素でしかないということを認めざるをえない。

この物語では、自然の息吹とでも形容できるような生命感が全編に横溢している。黒猫の登場のあと、娘が重態になり、泉の水が涸れてしまい、山火事が発生する。隆起するいくつかの丘と丘のあいだのくぼみのなかにある集落の住人たちは「自然の悪意」に翻弄されているのを自覚する。その「悪意」をあやつっているのは瀕死の老人ではないかと男たちは疑いはじめる。自然界がごく自然の歩みをたどっているだけなのに、人間には何らかの理由がほしいからである。それにまた、その老人はそうした嫌疑をかけられるに足るだけの不可解な言動を繰り返すことによって住民たちを煙に巻いていた。かくして物語が展開していく。

住人たちはいわば原始人に比較できるような状態で暮らしている。自然は人間に対して慈悲深いこともあれば残酷なこともある。雄弁な自然のなかで暮らす人間はどのような反応を示すだろうかということを、ジオノはこの物語で示そうとしたのである。

登場するのは、４つの家族からなるオート=プロヴァンスに典型的な寒村の住民たちである。しかし、彼らの貧しさがとりわけ強調されるということはない。彼らは、フランスの片田舎に行けば、どこででも出会うことができるようなごく平凡で愛想のいい人たちである。パスチスを飲んだり、猪の肉を食べたりして、一応は満ち足りた暮らしをしているのである。

ただ、世間から隔離されているため、時としてみながこぞって理性を失うというようなことが生じる。リュール山麓の自然が予想外の動きを見せれば、彼らの判断力に狂いが生じるというだけの話である。自然の猛威にさらされ孤立している寒村の描写は、何千年も昔の人間の姿を髣髴させるほどの迫力がある。躍動する自然に直面して狼狽しあわてふためく住人たちの姿を精彩ある文体で描ききったところに、この作品の独創性がある。都市文明化されてしまった私たちの記憶の奥底に残っているはずの原始人が、自然と直面したときに抱く畏れとでも形容できるような感情が、『丘』では主要な主題として取り上げられている。

事実、この地方には、今ではもう廃墟と化している集落の残骸がいくつも残っているのである。

自然の躍動の根源を知っているのはジャネだけである。ジャネは丘や草や鳥や水などの秘密に通じている。事実、村人たちが利用している泉はかつて彼が掘り当てたものである。このように考えるジョームは、自然界の謎に関心を抱きながらも、自然の秘密を垣間見るにはいたらない。他の登場人物たちはそうしたことにはほとんど関心も示さな

いし、自然の不可思議を感じ取るだけの感受性も持ち合わせていない。

『丘』を高く評価していたジッドが、知人たちにこの作品を称揚してまわったというのもよく納得できる。ジッドにとって、ジオノの描く南フランスの片田舎の生活は不可解な未知の世界だったにちがいない。ジッドがジオノの小説の世界を知りたいと思ったのも不思議ではない。ジオノの生活に関心を抱いたジッドは、何の前触れもなくマノスクのジオノの家を訪問するにいたる。この頃のジッドについてジオノは次のように回想している。「ジッドはこの作品をとても気に入ってくれて、「コメルス」[『丘』が掲載された雑誌]をポケットに入れて散歩し、彼が出入りしていたなじみのサロンで、間もなく出版されるはずのこの本について、そしてまた私という人間について、大々的な宣伝をしてくれたというわけです。」[4]

これ以降、オート=プロヴァンスを舞台にするさまざまな作品を発表していくジオノにとって、『丘』は最初に発表する作品としてまさに打ってつけの物語だったと言うことができる。ジオノはこの作品を次のような自然描写で開始している。

> 屋根の下までハクサンチドリの花が咲いている四軒の家が、密生した丈の高い小麦畑の上に姿を現す。
>
> それはいくつかの丘に囲まれており、大地の肉体が湾曲してたっぷりと盛り上がっているところである。
>
> 花をつけたムラサキウマゴヤシがオリーヴの木々の下で血を流している。柔らかな樹液で幹がぬるぬるしている白樺の木々のまわりを小さな蜂が踊っている。
>
> 泉から豊かに流れ出てくる水が二つの水源地で歌っている。水源地の水は岩から落ち、風がその水を撒き散らしている。水は草の下で喘いだあと、ふたつの流れは合流し、イグサの川床の上を流れていく。
>
> 風がプラタナスの木々をざわめかせている。
>
> それはレ・バスチッド・ブランシュ[白い農家]という集落である。
>
> 蒸気が混じった風が吹き荒れ唸っている高原と、野生のラヴェンダーが生えている広い砂漠、両者のまんなかにある廃墟のような部落。風に支配されているその一帯は、リュールの山々の麓にあるので、冷たい陰で覆われている。
>
> それは風の支配している大地である。
>
> 肉食獣たちが生息している大地でもある。蛇がアスピックの茂みから姿を現す。ふさふさした尻尾に守られた栗鼠が、どんぐりを手に持って走る。コエゾイタチが鼻面を風に突き刺す。一滴の血が口ひげの先端で光る。狐が草叢のなかにヤマウズラの通り道を嗅ぎつける。
>
> 雌猪が杜松(ねず)の茂みの下で唸る。ミルクを口一杯に含んでいる猪の子どもたちは、身振りの大きな大木に向かって耳をそばだてる。
>
> そして、風がその大木を通り過ぎ、沈黙が葉叢に安らぎを与える。鼻面をぐずぐず鳴らしながら猪の子どもたちは乳房を探し求める。(127)[5]

都会の人間にとって神秘的とも形容できるかもしれないこの情景は、オート=プロヴァンスに暮らしている人びとにとってはごく普通のありふれた光景である(すでに述べたように、描写は凝縮されている)。だから、彼らが『丘』を自分たちの生活を描いている物語だと思いながら読むのはごく当然のことである。地方生活を知りつくしたジオノ

だからこそ書くことができたのが上のような描写である。都市生活者が好奇心にかられて描く片田舎の物語ではなく、地方に根をはった作家が自らの生活の舞台を物語のなかに取りこんでいるのである。

まず「風」という語が7回も使用されていることに注目しておこう。丘と丘とのあいだのくぼみにへばりついている4軒の家が風にさらされている雰囲気が雄弁に描写されている。そこでは、人間たちが住んでいるというよりも、何よりも先にまず動植物の濃密な世界が存在する。屋根瓦までハクサンチドリに覆われた家が、丈の高い小麦の向こうに姿を現す。オリーヴや白樺などの樹木が茂り、生命の象徴である泉も勢いよく水を噴出させている。

蛇、栗鼠、鼬、狐、猪など、動物たちの動きに欠けることもない。この物語では動物や植物が人間より先に詳細に描写されていく。それが『丘』の特徴であり、魅力である。ジオノは、動物や植物はもちろんのこと、山や川や空や風や雲なども、それぞれ独自の人格を持っていると考えていた作家である。人間よりもいっそうの魅力を秘めている、そうした自然を彼は描くことに力を尽くしたのであった。

自然の描写がこれで終わるわけではない。

> 水鳥たちとレ・バスチッドの住人たちは泉で出くわす。岩場から流れ出るその水は、人間の舌や動物の毛にはとても心地よかった。
>
> 夕闇がおりるとすぐに、爬行する蛇や足に毛が生えた動物たちが荒地から、歌を歌っているこの涼しい水のところにやって来る。
>
> それに、日中でも、喉の渇きが激しくなると、動物たちは泉に近づく。
>
> 離れ猪が農場の方の匂いを嗅いでいる。
>
> 猪は人間たちの昼寝の時間を知っているのだ。
>
> 木々の葉叢の下を小走りに大きく迂回してから、猪は突進する。
>
> そうして猪は泉にやって来た。水のなかを転がりまわっている。泥が腹にへばりつく。
>
> 水の冷たさが、腹から背骨まで全身を貫く。
>
> 猪は泉の水をがぶがぶと飲む。
>
> 水の心地よい冷たさが皮膚の上で揺れ動く。
>
> しかし、突然、狼はこの至上の喜びから自分を引き剥がし、森の方へ疾走する。
>
> 農場のよろい戸が軋るのを聞きつけたのだ。
>
> 誰かがよろい戸を用心して開けると、よろい戸は軋るということを猪は知っている。ジョームは大よその見当をつけて散弾を発砲する。
>
> 菩提樹の葉が一枚落ちる。
>
> 「何を撃ったのだ？」
>
> 「猪だよ。ほら、あそこだ。畜生め」(127-128)

場面は村のなかの水場、泉に移る。そこは動物だけではなく村の住人も利用する場所である。水を求めて泉を訪れる動物は、そこで人間に出くわす。描写は少しずつ人間に近づく。蛇たちは夜に泉を訪れる。猪は昼間にもやって来る。猪は人間たちの午睡のすきにやって来て、水の冷たさを味わう。

農場の戸が開く音がすると、猪はさっと逃げる。ここで人間がはじめて登場する。ジョームが猪を狙い撃つが、しくじる。猪は人間を馬鹿にしている。

住人の説明に取りかかる前に、ジオノは視点を変えて村を上空から眺める。ジオノにとってきわめて大きな意味を持っているリュール山が村の西側を塞いでいる様子が次のように説明される。

> 静かで青いリュールの山がその地方を見おろしている。無表情な山の威容でもって西側を塞いでいる。
>
> 灰色のハゲタカたちがリュール山に取り付いて離れない。
>
> ハゲタカたちは、セージの葉のような水色の空を一日中旋回している。
>
> ときおり彼らは旅に出ていく。
>
> 旅に出て行かないときは、ハゲタカたちは風の平らな力に身体をあずけたまま昼寝をする。
>
> それから、リュール山が大地と空のあいだに伸び、夕闇が近づくと、リュール山の陰がレ・バスチッドを暗く染めていく。(128)

空を支配しているのはハゲタカである。彼らは、時には旅にでかけることもあるが、ふだんは一日中リュール山の上空を旋回している。空と太陽と大地が圧倒的にその存在感を主張している大自然のなかに飲みこまれてしまうような状況のもとで人間たちは生息している。住人たちの描写はいたって簡素である。

> それら四軒の家には二組の夫婦が住んでいる。
>
> まずゴンドラン・メデリックの夫婦。ゴンドランはマルグリット・リカールと結婚した。義父が彼らと同居している。
>
> ペルチュイスの女と結婚したアフロディス・アルボーの夫婦。
>
> 彼らには娘が二人あり、それぞれ三歳と五歳である。
>
> そのほかに、セザール・モラス、その母親、さらに孤児院からもらいうけてきた召使がひとり。
>
> アレクサンドル・ジョームは娘のユラリと住んでいる。最後に、ガグー。
>
> 彼らは全部で十二名である。数にも入らないガグーを入れると十三名になる。(128-129)

自然現象の雄弁な描写に反して、住人たちの説明は限りなく簡素である。住民たちの性格を描写するための形容語も見当たらない。まるで人間には生命が宿っていないかのような印象を読者は受ける。彼らが暮らしている４軒の家とその周辺の描写を見てみよう。

> 四軒の家が地面を固められた小さな広場を取り囲んでいる。その広場はみんなで共同に使う場所であり、ペタンク遊びの空間でもある。
>
> 洗濯場は楢の巨木の下にある。
>
> 洗濯物は、砂岩をくりぬいて作られた石棺のなかで洗う。石棺の内部はタイツをまとった男の姿に似ている。
>
> 死体の空洞には緑色にきらめく水が満たされている。水生昆虫が足で水を引っかくと、水は波紋を広げる。
>
> その重々しい墓石の縁は、月桂樹の枝で自分の身体を鞭打つ女たちの姿が装飾さ

れている。

オリーヴの木を引き抜こうとしたアフロディス・アルボーが、この古い石棺を発掘したのだった。(129)

かつてエクスの領主たちが高原の冷涼な大気を呼吸するために作ったという村は崩壊し、ほとんどすべてが土と化してしまった。わずかに残っているのが、石棺であり、村の入り口に立っている柱である。その石棺を洗濯用の容器として再利用しているのだが、内側には男、外側には女の模様が彫られているというのが微笑ましい。その洗濯場の上には楢の巨木が聳えている。ジオノの物語にしばしば出てくる楢の巨木は、これ以降、何度も言及されることになる。このあと、やっと四軒の家が紹介される。

家々も住人たちに似通っている。

無垢の葡萄の木がジョームの家を覆いつくしている。口の上に垂れ下がるガリア人の長い髭のように、葡萄の蔓がドアに垂れ下がっている。

すべての家がこういう風である。

アルボーの家は、年に二回オークル色に化粧塗りされる。ゴンドランの家も、モラスの家も、ガグーの家も同様である。

ああ！ガグーの家もそこに住む人間[ガグー]に似ているのは当然のことである。(129)

さらにガグーがこの村に迷いこんできた経緯が語られることにより、物語がゆっくりと進行しはじめる。ガグーは裸同然で、視線もうつろで、「ガグーガグー」とつぶやく以外言葉もしゃべれない男ではあるが、村人たちに食料を恵んでもらい、村のなかに粗末な家を建て、住人のひとりとして暮らしている。

以上、オート=プロヴァンスの寒村で、住民たちが自然界の一角で原始人のような暮らしをしていることが描写されているということを述べた。

2．村の長老ジャネ—村の祭祀をつかさどる幻視者—

登場人物はすべてで13名である(長老のジャネを診察するため遠くからやって来た医者を入れると14名になる)。

瀕死の状態にあるジャネは、今では高齢のあまりうわごとを言ったりしているが、かつては村の泉を掘り当てたほどの知恵者であり、自然界の事情に深く通じている。単なるうわごとと片付けてしまうにはあまりにも意味深長で不可解な仕種をジャネはしてみせる。

「蛇だよ。俺の指のなかにいる蛇だよ。指のなかに蛇が入っているんだ。うろこが皮膚の下を通るのが感じられる」

彼の短い笑いは、松かさを押しつぶすときのようにはじけた。

「俺は蛇たちを監視している。頭が爪のところまで出てくると、そいつを押さえつけ、引きずり出す。すっかり引きずり出してから、地面に叩きつける。そうすると、また別の蛇が指のところまで上がってくる。そいつも引きずり出し、叩きつける。この作業は長くかかるが、手のなかに蛇がいなくなれば、手は痛くなくなるだろうよ」

ゴンドランは、あっけにとられて、ジャネを、そしてベッドサイドマットを見つめる。何も見当たらない。赤と青の花柄だけだ。

「うわごとを言っている」と彼は言った。

「俺がうわごとを言っているだって？よく見るんだぞ……」

仕種が、緩慢に、入念に、繰り返される。ジャネは証拠を見せようとする。握りしめたこぶしがベッドの端から出て、開く……。ジャネの瞳は目の片隅で勝ち誇ったように輝いている。(138)

後年、ジオノはアムルッシュとの対話のなかで、このジャネの動作の描写に役立った自分の経験を語っている。ある農夫がジャネと同じように指から蛇を引き抜いたというのである。[6] この経験を核にしてジオノは『丘』を創作した。ジオノの創作方法が推測できる逸話である。ジオノは青々とした筋肉を持っている犂から『二番草』を着想し、亭々と茂っているブナから『気晴らしのない王様』を構想したのである。

ところで、ゴンドランには蛇など見えるはずがない。「うわごとを言っている」と言うゴンドランに向かって、ジャネはたんなるうわごととして聞き流せないようなことを言う。

「お前のその情けない目が何でも見えると思っているのか？身体は丈夫だが、お前には風が見えるのかい？

木を見て、同時に木以外のものを見るなんてことはお前にはできないんだ。

お前は、木がまっすぐ大地に突き刺さっていて、葉をつけて、そういう風にじっとしているとでも思っているのだろう。ああ！何という馬鹿者だ。そんなことなら、万事が簡単しごくなんだが。

お前には本当に何も見えないのか、その椅子の下には？」

「空気の他には何も見えないよ」

「空気のなかには何もないと、お前は思っているのか？

それじゃあ、あそこに家があり、向こうには木があり、そのもっと向こうには丘があるが、そのまわりには何もないとでもお前は考えているのかい？家はただたんに家だというだけで、それ以外のなにものでもないとお前は思っているのか？丘は、丘だけで、それ以上のなにものでもないなどと？

お前がそれほど馬鹿者だとは思っていなかったぞ」(138)

丘について、ジャネは、丘だって立ち上がることがあると指摘する。丘が立ち上がるなどと自分が言えば、ゴンドランはジャネがうわごとを言っていると考えるだろうとも付け加えている。作者ジオノは、基本的にはジャネのように考える人である。だから、自分の考えをジャネにある程度代弁させている。しかし、この物語のなかでは、ジャネは明らかにうわごとを言っていると考えられる。普通の人間ならそのようなうわごとを言うことはない。それまでの人生で、ジャネは多かれ少なかれ、そのように世界を見てきたのだと評価することができる。今、死を前にして、理性にいくらか狂いが生じてしまい、うわごとを言う羽目に陥っていると考えるべきであろう。このことに関しては、『憐憫の孤独』のなかの、沈んでいく夕陽に向かって太陽光線を食べるジョズレや、高原に巨大な羊を読み取るフェリップなどの挿話を思い起こす必要があるであろう。[7]

作者ジャン・ジオノは幻視者的な傾向を濃厚に持っている作家である。唯一の自伝的

な物語『ジャン・ル・ブルー』では、ジャンが妄想にふける場面が随所に見られる。例えば自宅のアパルトマンの湿った壁のなかにさまざまな影像を空想する場面を挙げておこう。[8]

高原に横たわる長さが数キロもあった巨大な羊を見たフェリップにならって、ジャネも丘のなかに牛を見る。

「今のところ、草の上に牛が横たわっているように、あの丘は横たわっている。そして背中だけが見えている。蟻たちが毛のなかを登り、あちこち走りまわっている。

今のところ丘は横たわっているが、あの丘が起き上がったら、お前は俺がうわごとを言っているなどと言うのだろう……」(139)

ジャネがうわごとを言っているのは事実だということは認めながらも、ジャネの言うことがまったくのでたらめでもないことに気づいたジョームは反省する。ほぼ同じ頃、トカゲを殺したあと、ゴンドランも世界をそれまでと違った風に見はじめる。植物にも血が流れていることに気づき、周囲の樹木をまるではじめて見るような眼差しで観察する。

はじめて、畑を耕しながら、樹皮の下を血が登っていることに彼は気づく。その血は自分の血と同じなのだ。強固なエネルギーがあのたくさんの枝を捻じ曲げ、あの草の息吹を空に向かって投げかけるのだ。

彼はジャネのことも思う。何故だろうか?

ジャネのことを考え、押しつぶされたトカゲの下で痙攣している茶色の土くれに目配せする。

血、神経、苦しみだ。

赤い肉、自分の肉と同じような肉に、彼は苦しみを与えた。

そうだとすると、彼の周りにある地上では、彼の身振りのすべてが苦しみを与えることになる。(147-148)

ジャネの力をいち早く見抜いているジョームは、ジャネの予知能力を探り出そうと試みる。ジョームとジャネの対話(というよりも、ジャネの独演)は、この物語のなかでもっとも緊迫した場面である。ジャネはじつに雄弁に自分たちを取り囲んでいる自然の神秘を語る。その大部分がジョームには不可解である。ジャネの毒舌の一部を紹介しよう。

「木は強い。捻じ曲がった枝によって空の重みを押し返すために木は百年を費やした。

動物は強い。とりわけ小さな動物は。

動物は草のくぼみのなかでひとり眠る。世界のなかでたったひとりで。

草のくぼみのなかでたったひとりで眠る。世界は動物のまわりでまんまるなのだ。

動物の心は強い。お前に殺されても叫ばない。お前の目を凝視する。目の針でもってお前の目を突き刺す。

お前は、死んでいく動物を存分に眺めたことはないか?

石は強い。風を共有しているあの大きな石たちはそれぞれ強い。石たちは、いつからなのかは知らないが、おそらく千年も前からだろうが、直立している」(180)

ジャネは「秘密を教えてやろう」(181)とジョームに語りかけるが、その言葉の意味をジョームが理解できるわけではない。ジョームは「ジャネにはもう黙っていて欲しかっ

た」(181)のであった。ジョームの思惑などにはお構いなく、ジャネは話し続ける。

「お前も俺も、俺たちはあの人のものなのだ。ただ、ずっと前から、あの人の膝まで登っていく道を俺たちは忘れてしまっていただけだ。俺たちは自分の力で自分の病気を治そうとしたし、自分を慰めようともした。この道を探し出せるということが必要だろうな。枯れ葉の下に埋もれている道を探すことだよ。道の上には枯れ葉が覆いかぶさっているので、枯れ葉を一枚一枚そっと手で取り除かないとならない。そうすれば、月光を浴びてまるで子羊のように跳ねまわる小径を、月が焼き焦がしたりすることはないだろう。

そして、俺たちがあの人の近くまで辿りつくと、小川のように唾液を流し、風のように言葉を吹き流し、あの人は俺たちに言うだろう。

『ものを捕まえて締め付ける美しい指を備えている男よ、近づくがよい。両手で愛撫するにはどうしたらよいのか私に見せておくれ。それこそ私がお前にまっさきに教えてやったことなんだよ。私の乳を口いっぱいにふくんだ赤ちゃんだったお前が私の膝の上にいた頃に』」

突如、壮大な幻想がかき曇る。

「……乳……く……口……。草野、羊毛、乳、乳、乳、乳……」ついで、下り坂で四輪馬車にブレーキがかかるように、大気をおろし金が削るような喘ぎが聞こえた。

ジョームはひと跳びでベッドにかけ寄る。

ジャネの身体は長く伸び、頭は枕のなかにめりこんでいる。開いた口の奥底で黒い液体がごぼごぼ音をたてている。死ぬのだろうか……。

「ジャネ、ジャネ、どうしたんだ！」

すでにあらぬ方を見ていた目が、こちらに戻ってくる。風に吹かれて震えるツルニチニチソウのように。目はしっかりし、口は回転する。

「……乳、乳で一杯の口、そしてお前の手に血は流れていない」

沈黙。

マルグリットがいびきをかいているのが聞こえる。

「これで終わりだ」ジャネは言う。「お前もしっかりするのだぞ」(181-182)

うわごとを言うジャネの意識はもうろうとしているはずであるが、言葉を操る能力が最後の自己主張をしているのである。

『ドミニシ事件覚書』において、殺人の容疑で裁判にかけられていた農夫ガストン・ドミニシは30から35くらいの語彙しか利用できないとジオノは強調した。[9] ましてやガストンが言葉遊びをするとか、単語を操るなどといったことはできるはずがないと考えられる。ところが、ジャネは音の連想までやってみせる。言葉が生きたものであり、自然が生命を持っているということを、ジャネが心得ているからである。

物語はこの場面で最高潮に達する。このあと、ジャネの言葉の呪縛の影響下で男たちは少しずつ態度を修正していく。共同体に亀裂が生じていくのである。ささいなことで口論し、それぞれ離ればなれになって暮らしている四人の男たちは、そのことを不安に感じるようになる。そうした状況を描写しているテクストを引用してみよう。

ジョームとモラスの言い争いがあってから、彼らは四人ともたがいに完全に離ればなれになって暮らしていた。モラスは自分のために水を汲みに行ったし、他の三人も自分たちのために水汲みに行った。別々に。彼らはそれぞれこっそりひとりで山のなかの小径に出かけていった。そして、荷車は一軒の家に帰ってくるだけだった。荷車がからになっても、彼らは他人に水を要求することはなかった。自分で山のなかの小径へと出かけていった。

しかし、そうしたエゴイズムは、彼らをそれぞれ孤立させると同時に、大地への思いやりを取り戻させ、大きな恐怖から遠ざけた。彼らは再生する間際にいた。(184)

流れるがままに任せて、住民たちがそれぞれ自分勝手な生活を送るか、それとも、もとの協力体制に戻るか、住民たちの最終決断が求められている。そこで、彼らは再生の方向を選ぶ。

住民たちは打ち捨てていた畑や葡萄畑を思い出し、自分たちの普段の生活を取り戻そうと気力を奮い立たせる。

アルボーは打ち捨てていた小麦畑を見にいった。穂が重すぎて茎が倒れ、そのフェルトのような黄色の穂のあいだからアザミが突き出ていた。忍耐強く、鎌を操り、彼は小麦の束を作った。ババットの呻き声やマリのぞっとするような病身から遠く離れて、こうして戸外で生きる喜びを味わった。ゴンドランは、ジャネから遠く離れて、葡萄畑で葡萄をかご一杯摘み取った。そこもまた、スズメバチやヒメネズミや食い意地のはった鳥たちの広大な共和国であった。ジョームは、ひなびた鍛冶場で犂の刃を鍛えなおした。腕を風車のように振りまわし、槌を拍子よく叩いたために、彼の疑惑は少しずつうすらいでいった。モラスは、ジョームから遠く離れたところで、イチジクを食べた。「明日になったら」彼は考えた。「仲直りをしよう、とあいつに言うことにしよう。俺は激しやすい性質だが、もうすんだことだ。みんなのために水を汲みに行くよ」

彼らはほとんど再生しかかっていた、と私は読者のみなさんに言いたい。そのためにたくさんのことが必要だったわけではない。さらにそのあとで、猫が現れた。桑の茂みから出てきて、日のあたるところを歩き、ジャネの窓に飛び上がった。そうするのに五分以上かかったわけではない。しかし、そのあいだに、大地と大気は邪悪な相貌を帯びてきた。(184)

その黒猫はたびたび現れる。しかも、今ではジャネの悪意を象徴するかのように、ジャネのベッドの上に坐っているのである。

ジョームは、そのとき、この世に対するジャネの呪いをはっきり読み取った。

ジョームは伸び上がる。向こうのゴンドランの家では窓が開いている。シーツの下のあのふくらみはジャネだ。

「ああ！ジャネよ、俺は今こそお前さんの底意地の悪さが理解できる。それはまるで山のように俺の前にまっすぐ伸びている。お前さんはバリケードの向こうの大地や樹木たちや動物たちと一緒にいて、俺たちに敵対している。とんでもない野郎だ。女房は納屋のなかで首を吊った。あれは俺が野兎を待ち伏せしていた夜だった。あれを仕組んだのはお前なんだ。たしかに、お前の両手を使ったわけではないが、お前の舌、お前のきたない言葉を使ったのだ。お前の口のなかには、悪事をやっての

けるにふさわしい甘ったるいジュースのすべてが潜んでいる……」

ジョームは近づく。窓の前にあるイチジクの木の幹は節くれだった二本の枝に分かれている。その二股の上に彼は登る。そこからだと部屋のなかがよく見える。

ジャネはこわばっている。ジョームの視線は暗闇のなかを壁のところまで滑っていく。そこには郵便局のカレンダーがぶら下がっている。低い声で彼はつぶやく。あいつはひとりなのかな？

そうではなかった。

彼の近くのベッドの上には猫がいる。(189)

3．災い

上の引用文はジャネと猫が一体化している光景である。黒猫は災いを招き寄せる。その黒猫とジャネは一心同体である。つまりジャネは災いを引き寄せる。ジャネの呪いが村に広がっていく。

このあと村のすぐ近くの森林が激しい火事に襲われる。年間降水量が 500 から 600 ミリのこの地方では、毎年のように夏になると大規模な山火事が発生する。当然のことながら、雨が降らない夏では山火事の可能性はきわめて高くなる。事態は現在でも変わらない。その自然災害に人間の意図を読み取るのは人間の空想力である。

山火事の描写には明らかに黒猫が入りこんでいる。炎と化した黒猫が暴れまわっているのが実感できるように巧みに描写されている。

午前三時の時報が鳴り響いたとき、動物のように柔軟な炎はエリカの茂みのなかから跳躍して出てきた。その動物は今では松林のなかで大騒ぎをしていた。その時は、それほど大きな被害を受けることなくその動物を制御できるとみんなは考えた。しかし、動物はその日は一日中、そして夜になってもまだまだ、激しく突撃しつづけたので、村の男たちすべての腕をへし折り、脳髄を消耗させてしまった。夜が白みはじめたとき、動物はそれまでにもましていっそう頑強で陽気に、奔流にも似た幅広い身体をいくつかの丘のあいだで捻じ曲げているのが村人たちには分かった。もう遅すぎた。

それから、動物は森林や荒地に自分の赤い頭を押しこんでいった。炎でできた腹がそのあとにつづく。さらにうしろにある尻尾は燠と灰を打ち据える。動物は匍匐し、跳躍し、前進する。爪で右や左を叩く。ここでは、動物は楢林の腹をえぐり、向こうでは、大口を開き二十本の白い楢や玉房のような三本の松をむさぼり食う。投槍のような舌は方向を確かめるために風を探る。まるで自分の進んでいる方向が分かっているようだ。

そして、モラスがくぼ地で認めたのは、血を滴らせている動物の鼻面であった。(192)

猛威を振るう山火事もやがて収束する。しかし、ジャネが残っている。

火事を消し止めようと必死の努力を続け、つい先ほど目にした光景を思い起こしつつ、事態の核心はジャネにありとモラスは確信する。ジョームだけではなく他の住人たちもジャネの悪意に思いをはせることになる。

つい先ほど村に戻ったとき、何より先に彼[モラス]が見たのは、ジャネの部屋の窓であり、ジャネのベッドであり、ベッドに横たわっているあの白い隆起である。あれはジャネの身体なんだ。

そのとき、事態の核心、結び目、呵責ない運命の歯車の中央部、それは骨と皮でできたこのジャネの小さな塊だということを、彼は確信した。突如、彼は、自分のまわりで、大地の生命が野兎の跳躍となり、飼い兎の噴出となり、鳥の飛翔となって、ほとばしり出るのを目撃した。彼の足元から、大地が動物たちの気配を分泌し、キリギリスたちの動作を開始する乾燥した音が響き、雀蜂たちのいくつかの群が呻く。向こうの古い葡萄の株の端にとまっている蟷螂が炎に向かって鋸の刃のような巨大な口吻を投げつける。狂いたったクソムシが葡萄の根元で喘ぐ。蚯蚓がまるで小川のように草の陰で蛇行する。事態を心得ている動物は逃げさっていく。(201)

かくして物語は、ジャネ虐殺の計画へと進展していく。あらゆる災厄の源になっているジャネの生命を絶とうという結論に彼らはたどりつく。

「奴を殺さねばならない。これ以外に道はない。俺たちみんなをどうやって殺そうかと奴は企んでいる最中だろう。俺たちは本当に生きていきたいのか、バベットや娘たちやレ・バスチッドを本当に救いたいのか、確かめる必要がある。自分たちを守るためには、それしかないんだよ。俺たちは丘の総体と闘ってきた。丘の頭を叩きつぶす必要がある。丘の頭がしっかり立っているかぎり、俺たちはいつ死ぬかもしれないんだぞ」

「奴だって人間だぜ」ゴンドランは言う。

「奴は人間じゃない」ジョームは言う。「人間は、あんたや俺や他のみんなもそうだが、生命に対して敬意を持っている。風が吹きつけているときに小さなランプを持っているような具合に、俺たちは生命と対峙している。俺たちはランプを手のなかで守り、そのランプの前で怖がっていることになる。あんたは手のひらのくぼみにちょうどおさまるくらいの小さな熱い若鶏はよく捕まえただろうが？指のあいだにいる若鶏を、あんたが少し握りしめさえすれば、簡単に押しつぶせるだろう。そんなことをしようなどと俺たちは思いもしなかったはずだ。それは俺たちが人間だからだよ。奴が手のひらのなかに持っているのは、若鶏なんかじゃない。俺たちなんだぜ。奴が拳を握りしめていて、その拳をとことんまで握りしめるつもりだということに、俺たちはもう気付いたんだ」(210)

娘婿のゴンドランが首を絞めるという最終決断が下された丁度そのとき、ジャネは事切れていた。ドラマの緊張はこうしてあっけなくとけてしまう。住民たちがジャネの悪意の仕業だと考えたものはすべて自然のなりゆきでしかなかったのであった。私たちは自分が追いつめられると、いろんなところにさまざまな意図を読み取ろうとするのだが、世界はそうした人間の浅はかな知恵とはまったく関係のないところで動いている。人間は自分が見たいと思うものを世界のなかに読み取っていくのである。『丘』の重要なテーマのひとつである。

ジャネが口走る妄想を聞くことにより、住人たちは自分たちの妄想を膨らませる。そこからとんでもない結論を導き出し、それを実行に移そうとしていた。妄想が妄想を招きよせた結果であった。

4．ユラリとガグー

この物語の最後を飾るのはユラリの誠実さである。知恵足らずの男ガグーと密会していたユラリは、ガグーが焼け死んだということを知ると彼を埋葬するために出かけていく。容貌が醜いために通常の恋がかなわなかった彼女は、ガグーとのひそかな密会に情熱を燃やしていた。今、父親ジョームの視線を恐れることなく、彼女は決然と行動する。この物語の読後感を爽快なものにしてくれるひとこまである。

「あの人はどこで死んでいるって？」

「ブルヌだよ」

彼女は道具類が置いてある片隅に行く。がらくた類のなかを手探りし、真新しいシャベルを取り上げる。

彼は彼女の動作のすべてを鏡のなかで追う。

シャベルの刃に手を当ててから彼女は戸口に向かう。ジョームは振り返る。彼はゆっくり振り返ろうと試みる。はっきり話そうとしたが、出てきたのは石鹸の泡のなかを通過するような不明瞭な息だけである。

「どこへ行くんだ？」

「あの人がいると父さんが言ったところよ」もう一度ユラリは言った。

彼らは互いに目のなかを見つめあう。そして、かすかに、ユラリは自分の顔の表情をゆるめる。口の近くで皺が一本うがたれ、隆起し、瞼が震える……。彼女はそっとドアを閉め、降りていく。(215)

父親の視線を避けることもなく、ガグーの死体を埋葬するために、彼女はシャベルを持ってひとりで出かけていく。他の住人たちは焼け死んだガグーの死体に敬意を払うことなく、放置するつもりだった。ユラリがひとり決然と行動する。容姿が醜いと言われているユラリの心のなかに、人間としてのきわめて真摯な心情を読みとることができるので、私たち読者は何か救われたような気持になる。この物語の最高に素晴らしい場面である。

火事で生命を奪われたガグーは、火事という現象を理解できなかったように描写されている。言葉も話せないガグーは、しかし、村の泉が枯れてしまったとき、自分の力で廃墟になってしまっているかつての集落のなかに水源を探し出してきたのであった。通常の能力に欠けてはいるが、ある種の超能力を所有している人物はジオノの物語にはしばしば登場する。雨のなかを穏やかな表情で歩く『喜びは永遠に残る』のなかの盲目の薬草行商人[10]、『世界の歌』において暗殺されてしまったマトゥロの捜索に出かけたアントニオとトゥッサンを、暗闇のなかで鋭敏な予知能力を発揮しつつ導いていく、同じく盲目の女性クララ[11] を挙げるにとどめておこう。

ジオノのまわりに生活していた職人たちはもちろんのことだが、障害を背負っている人たちにも、ジオノは慈しむような眼差しで接していたのである。ガグーはほとんど喜ぶようにして火事のなかに身を投じていったのであった。

ガグーは、ジョームの上着を手放すと、やみくもに煙のなかに走りこんでいった。彼はわめきちらした。怖かったのだ。ところが、突如、彼は感嘆し、喜びに打ち震

えながら、すべての動きを停止した。長いよだれの糸が唇のあいだから滴り落ちる。

厚いカーテンが裂けた。目の前ではネズが十本ほどかたまって燃えている。事はすぐに終わり、炎が跳躍する。しかし今や、まるで十本の燭台が光り輝いているようだった。枝という枝は燠であり、小枝もすべて燠になり、森のささいな組織もまた燠と化している。それらは生命を持っている樹木のようにまっすぐ立っている。生気のない黒い森ではなくて、それらは火の虫である。虫たちは、軽快で鮮明な音をたて、波うち、身を捩り、とぐろを巻き、広がる。素晴らしい光景だ。

「ガ、グ……」

ガグーは近づき、手を差し伸べ、彼の両足を打ち砕いていく万力のような火をものともせずに、無数の金の燭台がきらめいている国のなかに入っていく。(199-200)

こうして、ガグーは光の王国に入っていった。

村の泉が涸れてしまったときに泉を探し当ててきたガグーこそ、住民たちの救い主だったのである。物語の結末で住人たちが「俺たちの水の味は素晴らしい」などと平和な情景を楽しむことができるのもガグーのおかげなのである。さらに、ユラリが心踊る恋を味わうことができたのもガグーのおかげだったのだということも心に銘記しておく必要がある。

5．平穏な情景

物語のはじめで、ゴンドランは泉のかたわらでひとりアプサントを飲んでいた。ついで、馬を連れ帰ってきたセザールと、そして義父を診察に来てくれた医者とともに、ゴンドランはアプサントの杯を傾け続ける。泉の水音が聞こえ、じつにのどかで平和な情景であった。

最後の場面も同じく村の中央にある泉水のかたわらに設定されている。楢の大木の下で男たちは泉の水を味わっている。いつものようにアプサントは不可欠である。

ジョームとゴンドランは、泉水の縁石に腰かけている。彼らはアプサントを飲んでいる。水汲み場の水に映って瓶はダンスしている。時は夕刻である。星が冷たく感じられる季節である。

「俺たちの水の味は素晴らしい」

リュール山の陰が大地の半分を覆っている。家々から、食器の物音や揺りかごの歌が聞こえてくる。(216-217)

物語のはじめでは撃ちそこなった猪を、この最後の場面で、ついにジョームがしとめる。みんなで解体し、肉を分けあう。久しぶりに新鮮な猪肉にもありついた彼らは、美味しい水とともにアプサントを味わいつつ、幸福を満喫する。

彼らはまだ熱い猪の皮を剥ぎ、それぞれ両手を使って肉を分配する。そして男たちは水飲み場の澄んだ水で手を洗う。ジョームは毛皮を自分のものにした。二本の柳の枝で毛皮をぴんと広げ、楢の低い枝にそれをぶら下げた。そうすると、露にあたり、毛皮が柔らかくなるのだ。(217-218)

この猪は物語のはじめでは、住民たちが昼寝している頃を見計らって、じつに用心深く泉に忍び寄っていたが、物語のなかばになると、村人たちの関心が彼らの災厄に集中

しているので、白昼、堂々と現れるようになる。住民たちを馬鹿にしきっていたのだった。しかし、物語の最後になると、村にはふたたび平穏が訪れ、村人たちは心の余裕を取り戻している。そのため猪はジョームにしとめられてしまう。それとともにジョームの権威がよみがえる。別の言葉で言えば、住民たちは人間としてのいささかの威厳を回復したのであった。

こうして物語は次のように首尾よく終わる。

> 今は夜である。四軒の家で最後まで明かりのついていた窓から明かりが消えたばかりである。大きな星がひとつリュール山の上で不寝番をしている。
>
> 夜の風に吹かれて回転している毛皮が、太鼓のような低い唸り声をあげている。黒い血が涙を流して草のなかで泣いている。(218)

「黒い血」とは殺された猪の血であろう。猪の肉は分配され、毛皮は楢の木の枝に吊り下げられ、地面に落ちた血は泣いている、といった光景である。人間たちは満ち足りている。ついに猪は彼らの犠牲になったのである。いつかその反対のことが住人たちを待ち構えていても、何らおかしくないということも暗示されている。物語がふたたび冒頭から繰り返されたとしても、何ら不思議はないのである。

『丘』はオート=プロヴァンスならどこにでも転がっているような寒村の物語である。この物語に生命を与えたのは、相次ぐ災厄に自然の悪意を感じ、それを操っているのがジャネであるとまで思うようになっていく男たちの不安感の高まりを、緊張感を持続させて描写したジオノの創意あふれる文体である。人間は自分が作り上げる妄想に翻弄されるということを知りつくしていたジオノだから、巧みに緊張感を盛り上げていくことができたのである。

ガグーとユラリのおとぎ話を思わせるような恋はきらりと輝く挿話になっている。死者となってしまったガグーを埋葬するためにひとり出かけていくユラリの誠実さはかならず読者の心を打つであろう。

相次ぐ災厄とジャネの自然死とガグーの焼死があったにもかかわらず、世界はほとんど何の変化もなかったかのように息づいている。泉のかたわらでのアプサントの光景が繰り返される。清冽な泉の水が読者の記憶に残る。アプサントを楽しむ男たちを見守るのは、広場の中央に聳えている楢の大木である。

注

[1] Pierre Citron, *GIONO*, pp.120-121, Editions du seuil, 1990.

[2] Jean Giono, *Colline*, p.13 (Péface à *Colline* par A. M. Marina-Mediavilla), Livre de poche, Grasset, 1998.

[3] なお、「幻視者」ときわめて関わりの深いジオノの「法螺吹き」としての側面については以下を参照されたい。ジャン・ジオノ著、山本省訳『木を植えた男』(彩流社、2006年)、解説(74-87頁)。

[4] Jean Carrière, *Jean Giono, Qui êtes-vous?*, p.133, Editions La Manufacture, 1996.

[5] Jean Giono, *Colline*, Œuvres romanesques complètes, tome 1, p.126, Pléiade, 1971.(以下、この作品からの引用については、同書の頁数だけを記す。訳文はすべて拙訳を用いる。)

[6] ジオノ自身の言葉を引用しておこう。「『丘』における心理はきわめて原始的なものです。あれは小

説ではなくて詩だということも付け加えておきましょう！私が先ほど話題にしたギリシャのドラマとじつによく似通ったドラマなのです。だけど、あれは詩ですよ！『丘』は詩です！『ボミューニュの男』や『二番草』も、同じように詩なのです。この作品のなかの心理は極度に素朴なものです。本物のジャネの死に私は本当に立ち会ったのです。『牧神の紹介』のなかでもジャネのことを書きました。私の前で死んでいく年老いた農民の苦しみに立ち会ったこともあります。この農民はアル中で自分の手の指から蛇を引き抜いていました。そこから『丘』が生まれてきたのです。私はジャネを見たのです。実際のジャネに付け加えたことは何もありません。それ以上のことは追究しませんでした。そのジャネという人物のなかに本質的なものが潜んでいるということが私にはよく分かりませんでした。私は、ごく単純に、ジャネの外観を描写するにとどめたのです。それに、ジャネの内面の心理は『丘』では説明されていません。『丘』を書いているときには、私はロマン[小説]を作りたくなりましたが、ロマンはできませんでした。私の作りあげたのは詩だったのです！」(Jean Giono, *Entretiens avec Jean Amrouche et Tao Amrouche*, p.142, Gallimard, 1990.)

[7] Jean Giono, *Solitude de la pitié*, Œuvres romanesques complètes, tome 1, pp. 506-509, 515-517, Pléiade, 1971.

[8] Jean Giono, *Jean le Bleu*, Œuvres romanesques complètes, tome 2, pp. 38-40, Pléiade, 1972.

[9] Jean Giono, *Notes sur l'affaire Dominici*, Journal, poème, essais, pp. 696, 704, Pléiade, 1995.

[10] ジャン・ジオノ『喜びは永遠に残る』(山本省訳、河出書房新社、2001 年)、241-246 頁。

[11] ジャン・ジオノ『世界の歌』(山本省訳、河出書房新社、2005 年)、275-281 頁。

参考文献

1. Pierre Citron, *GIONO*, Editions du seuil, 1990.

2. Jean Giono, *Colline*, Livre de poche, Grasset, 1998.

3. Jean Carrière, *Jean Giono, Qui êtes-vous?*, Editions La Manufacture, 1996.

4. Jean Giono, *Colline*, Œuvres romanesques complètes, tome 1, Pléiade, 1971.

5. Jean Giono, *Entretiens avec Jean Amrouche et Tao Amrouche*, Gallimard, 1990.

6. Jean Giono, *Solitude de la pitié*, Œuvres romanesques complètes, tome 1, Pléiade, 1971.

7. Jean Giono, *Jean le Bleu*, Œuvres romanesques complètes, tome 2, Pléiade, 1972.

8. Jean Giono, *Notes sur l'affaire Dominici*, Journal, poème, essais, Pléiade, 1995.

9. ジャン・ジオノ著、山本省訳『木を植えた男』、彩流社、2006 年。

10. ジャン・ジオノ著、山本省訳『喜びは永遠に残る』、河出書房新社、2001 年。

11. ジャン・ジオノ著、山本省訳『世界の歌』、河出書房新社、2005 年。

(信州大学 全学教育機構 教授)

2008 年 1 月 19 日 採録決定